福部村埋蔵文化財調査報告書第13集

TOTTORI KEN　IWAMI GUN　FUKUBE SON
鳥取県岩美郡福部村

UENO　KODOU
# 上野古道遺跡発掘調査報告書

2000

福部村教育委員会

上野古道遺跡発掘調査報告書　2000　鳥取県岩美郡福部村教育委員会

# 序　　文

福部村内には、原始・古代の人々が力強く生活を営んだ痕跡が数多く残されており、近年の発掘調査から数多くの貴重な調査報告がなされています。これらの報告では、県下でも数少ない縄文時代の遺跡が３ヶ所確認されており、この時代から本村一帯が衣食住に恵まれた定住しやすい環境にあった事を窺わせています。

特に昭和62年から３年間の継続調査が行われた「梨谷遺跡」の発掘調査では、膨大な縄文土器などの出土遺物とともに縄文時代の加工技術の高さを窺わせる木製杓子が発見され、多くの出土品と共に重要文化財に指定されています。

この調査を契機に村内に所在する遺跡の重要性が再認識され、遺跡の保護と資料館の設置により沢山の人々にご覧いただく機会ができたことを感謝しています。

今回行った上野古道遺跡の発掘調査は、主体をなしてきた古墳時代以前の調査から江戸期まで踏み出したことで、この時期の資料に乏しかった本村の歴史を補う意義有る発掘調査であったと思います。特に道という性格から少なからず文化の交流を感じ取れる今回の調査は、多くの思いをかきたてる事業となりました。

終わりに、今回の発掘調査事業を実施するにあたり、鳥取県農林水産部、鳥取県教育委員会をはじめ、関係各位の多大なるご指導、ご援助に対し深甚なる感謝を捧げるとともに、発掘調査事業地近隣の地権者と調査に従事していただいた皆様に対し厚く御礼申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

平成12年３月

福部村教育委員会
教育長　老　門　辰　生

# 例　　言

1．本書は、鳥取県（鳥取地方農林振興局）の委託により、平成11年（1999）度に福部村教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した「上野古道遺跡発掘調査報告書」である。

2．発掘調査の対象となった「上野古道遺跡」は、鳥取県岩美郡福部村大字左近字毛合川1463-8・1463-5・字赤坂1411・字井尻谷1403・大字久志鑢字大谷山799・801に所在する。

3．本書に使用した挿図の座標・方位は磁北であり、標高は東京湾潮位を基準としている。

4．本書に掲載した挿図３の地形図は、「建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5000分の１国土基本図を複製したものである。」

5．本書の執筆は、鳥取県教育委員会の指導のもとに谷岡陽一が執筆編集を行った。

6．出土遺物・図面・写真等の整理は、鳥取県教育委員会の指導により調査員が行った。

7．出土遺物・実測図等は福部村教育委員会で保管している。

8．出土遺物には、〔例：UN-３（上野－遺物番号３）〕とネーミングしている。

9．発掘調査及び本報告書の刊行に際し、次の方々からご指導、ご援助をいただいた。銘記して感謝申し上げます。

赤木三郎（放送大学鳥取学習センター）　久保穣二朗（鳥取県教育委員会事務局）
齋藤明彦（鳥取県教育委員会事務局）　藤本隆之（鳥取市埋蔵文化財センター）
八峠興（鳥取県教育文化財団）

# 目　　次

序　　文
例　　言
本文目次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
　第1節　調査の経緯……1
　第2節　調査の経過……1
第Ⅱ章　上野古道遺跡の位置と環境……2
　第1節　上野古道遺跡の位置と自然的環境……2
　第2節　上野古道遺跡の歴史的環境……3
第Ⅲ章　発掘調査の概要……6
　第1節　上野古道遺跡の概要……6
　第2節　第1調査区……7
　第3節　第2調査区……10
　第4節　第3調査区……13
第Ⅳ章　出土遺物……15
　第1節　遺物の検出状況……15
　第2節　出土遺物……15
第Ⅴ章　発掘調査の成果とまとめ……16
報告書抄録……18
図版編

# 挿　図　目　次

挿図1　福部村位置図……2
挿図2　福部村内遺跡分布図……4
挿図3　上野古道遺跡路線図……6
挿図4　第1調査区全体図……7
挿図5　第1調査区検出石畳遺構平面図……9
挿図6　第2，第3調査区全体図……10
挿図7　第2調査区検出石畳遺構平面図……11
挿図8　第2調査区横断溝の流水系統図……13
挿図9　第3調査区検出石畳遺構平面図……14
挿図10　出土遺物実測図……15

# 図　版　目　次

図版１　①上野古道遺跡遠景　②上野古道起点部の石畳　③調査前の第１調査区　④現地踏査で検出された石畳　⑤発掘調査作業風景　⑥全貌を表した石畳

図版２　①第１調査区石畳遺構全景　②第１調査区石畳遺構　③第１調査区石畳遺構　④第１調査区の座状に石を配列した古道　⑤第１調査区石畳と座状遺構

図版３　①第１調査区の階段状の石畳と屈曲部　②第１調査区石畳遺構の北側起点部　③調査前の第２調査区　④完掘後の第２調査区　⑤第２調査区石畳横断溝　⑥完掘後の第２調査区

図版４　①第３調査区石畳遺構全景　②第３調査区の石畳遺構の敷設状況　③第３調査区西側起点部の石畳遺構　④第３調査区西側起点部の拡大

図版５　①上野古道遺跡出土遺物

# 第1章　調査に至る経緯

## 第1節　調査の経緯

人とひとの交流のは、道から始まり生活して行くうえで欠くことのできないものであり、往来の頻度が増す毎に改良されて行く。そして新設される道ができれば、廃道となる道もでき、まさに道路は文化のバロメーターとして地域の生活環境に定着している。

東部広域農道は、鳥取県東部の岩美町真名から本村の蔵見に至り、上野山を経て国府町美歎を結び、山間地を巡ることで地域の農林業振興を図ることを目的に新設される道路で、正に旧道と新設道路の因果関係にある。

今回の調査対象地である上野山麓は、岩美町（岩常）から福部村蔵見に至り、県道池谷福部停車場線と交差して、上野の山を越え、国府町（美歎）へ至る東部広域農道の建設計画路線にあり、建設工事を担当する鳥取県（鳥取地方農林振興局）より福部村教育委員会へ埋蔵文化財の有無について調査依頼が提出された。

当地は、江戸時代に編さんされた「因幡誌」を要約すると、左近集落から上野山を超え、鳥取市滝山と、国府町美歎に至る「火打坂」との記述がある。もし、それと確認されれば、間道ではあるものの福部村にとって文化の交流したルートを解明する手掛かりとなるものであり、左近集落には起点となる石畳の古道が現存している。

福部村教育委員会では、この調査依頼に基づき、鳥取地方農林振興局職員の案内で現地踏査を実施した。その結果、雑木の繁茂した小道が確認され、道路建設予定地内の２ヶ所共敷石状の痕跡が確認された。

## 第2節　調査の経過

この現地踏査結果を基に鳥取地方農林振興局と事前協議を行った。その結果、福部村教育委員会が調査主体となり、道路建設で削平、盛土となる範囲の発掘調査を行い、記録保存を行うことになった。

調査は、５月31日から実日数約20日間の予定で着手したが、比較的温暖で、天候に恵まれたことから予定どおりの進捗状況を見せ、６月23日で現地調査を完了し、翌年３月20日で室内整理作業を完了した。

**発掘調査の組織**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 調査委託機関 | 鳥取県（鳥取地方農林振興局） | | | | |
| 調査団長 | 老門辰生（福部村教育委員会教育長） | | | | |
| 調査委員 | 田村義朗（福部村文化財保護委員長） | 河本康二（福部村文化財保護委員） | | | |
| | 黒田一郎（福部村文化財保護委員） | 小谷博文（福部村文化財保護委員） | | | |
| | 森原増美（福部村文化財保護委員） | 横山　利（福部村文化財保護委員） | | | |
| 調査指導 | 鳥取県教育委員会 | | | | |
| 調査員 | 谷岡陽一　福部村教育委員会社会教育係長 | | | | |
| 作業員 | 宇山光徳 | 河本康二 | 岸　守 | 黒田一郎 | 小谷博文 |
| | 田村義朗 | 横山　利 | | | |
| 整理作業員 | 河原孝子 | 中原亮子 | | | |

# 第Ⅱ章　上野古道遺跡の位置と環境

## 第１節　上野古道遺跡の位置と自然的環境

福部村は鳥取県東部の、東経134度17分、北緯35度32分に位置している。北は日本海に面し、東は日本海に突出した独立峯のような駟馳山山頂から、南に延びる立岩山山系の分水界で岩美町に接している。西は国の天然記念物に指定されている鳥取砂丘から多鯰ガ池を経て摩尼山山系の分水界で鳥取市に接し、更に南東の稲葉山に至り、稜線を縦貫する村道宇倍野線を界して国府町に接している。

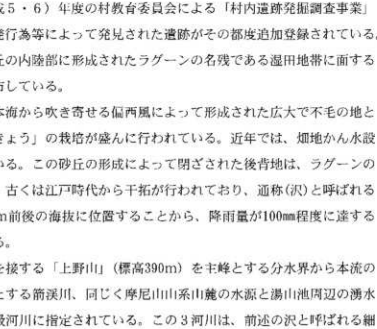
この東西南の三方を各山系に囲まれた内陸は、日本海沿岸に発達した砂丘が福部の湾口を閉ざし、沖積平野状となって、東西約９km、南北約10km、総面積34.９4km²で、日本海に開けたＶ字の地形を形成している。

村内には、鳥取県の縄文時代遺跡を代表する「栗谷遺跡」・「直浜遺跡」等、15遺跡と約200基の古墳が周知の遺跡として確認されている。[注1] その大半は1976（昭和51）年に鳥取県教育委員会と福部村教育委員会によって行われた遺跡分布調査と1993～1995（平成５・６）年度の村教育委員会による「村内遺跡発掘調査事業」を契機に遺跡台帳が整備され、突発的な開発行為等によって発見された遺跡がその都度追加登録されている。

これらの遺跡、古墳群の大半は、鳥取砂丘の内陸部に形成されたラグーンの名残である湿田地帯に面する微高地と、主要河川に面する丘陵周辺に分布している。

砂丘活動の起源は約３万年といわれ、日本海から吹き寄せる偏西風によって形成された広大で不毛の地といわれた砂丘地は、大正の中頃から「らっきょう」の栽培が盛んに行われている。近年では、畑地かん水設備の導入により全国有数の生産高を誇っている。この砂丘の形成によって閉ざされた後背地は、ラグーンの名残である「湯山池」・「細川池」が所在し、古くは江戸時代から干拓が行われており、通称(沢)と呼ばれる湿田地帯に水稲栽培が行われているが、１ｍ前後の海抜に位置することから、降雨量が100mm程度に達すると広範囲に灌水して、潟湖のように変貌する。

河川は、鳥取市、岩美町、国府町との境を接する「上野山」（標高390m）を主峰とする分水界から本流の塩見川を形成し、摩尼山山系の山麓を水源とする箭渓川、同じく摩尼山山系山麓の水源と湯山池周辺の湧水を水源とする江川の３河川が主要河川で２級河川に指定されている。この３河川は、前述の沢と呼ばれる細川の湿田部で合流し、鳥取砂丘の東端を蛇行して駟馳山裾の岩戸港の河口へ注いでいる。



挿図１．福部村位置図

気候的には、比較的に温暖で過ごしやすいが、年間降水量は2000mm前後で、山陽方面に比較するとかなり多く、冬季には平野部で50cm前後の積雪を見ることがあり、上野山では１ｍを上回る積雪もさほど珍しくはない。

しかし、雪解けとともに新緑を迎えた上野山からは、鳥取平野、福部平野、

その北方には空と境が判別できないほど青く澄んだ日本海、沿岸は延長く発達した国立公園鳥取砂丘を一望するパノラマ的風情を俯瞰できる。

この砂丘南端の後背地には、縄文時代中期を主体とする直浪遺跡、縄文時代後期初頭を主体とする栗谷遺跡が所在している。両遺跡は、前述の湯山池・細川池の湖岸に位置し、対岸の摩尼山山系から幾重にも延びる丘陵先端部には、数多くの古墳が所在していることから、県東部の湖山池、県中部の東郷池のように、湖畔に突き出た丘陵上に古墳群が築造されている形態に酷似している。

この福部の地に、人の生活が営まれ始めたと推定される縄文時代前期は、いわゆる縄文海進によって現在の平野部の大半が日本海に没する入り海若しくは、島根県の宍道湖のように海水と淡水が交じり合う汽水湖であったと考えられている。

原始・古代と永く人の暮らしをたどることのできる福部の地は、この一帯が狩猟、採集、魚捞を糧とする縄文時代からの生活が継続されており、直浪遺跡と栗谷遺跡が対岸とは言え、近接しながら双方の遺跡ともに縄文時代・弥生時代・古墳時代と永期にわたり、同じ場所での生活が営まれている。したがって、この外海に通ずる入り江を拠点としたに舟による海上交易が行われていたことは間違いなかろう。

註1　福部村教育委員会『福部村内遺跡発掘調査報告書』1995
註2　福部村『福部村誌』1941

## 第2節　上野古道遺跡の歴史的環境

福部村内では、旧石器時代の遺跡・遺物は発見されていないが、鳥取県東部に分布する縄文時代の遺跡では、早期の押型文土器が出土している鹿野町の柄杓口遺跡に次いで、栗谷遺跡が前期まで遡る遺跡として確認されている。栗谷遺跡の発掘調査では、ドングリ・クルミ、トチの実などを貯蔵した37基の貯蔵穴群と土器・石器の他、木器・網代編みの籠・もじり編みの網などが低湿地遺跡特有の良好な遺存状態で検出された。

これら多種多様の出土遺物は、縄文時代の生活様式を知ることのできる貴重な資料として平成6年に61点が「重要文化財」に指定されている。

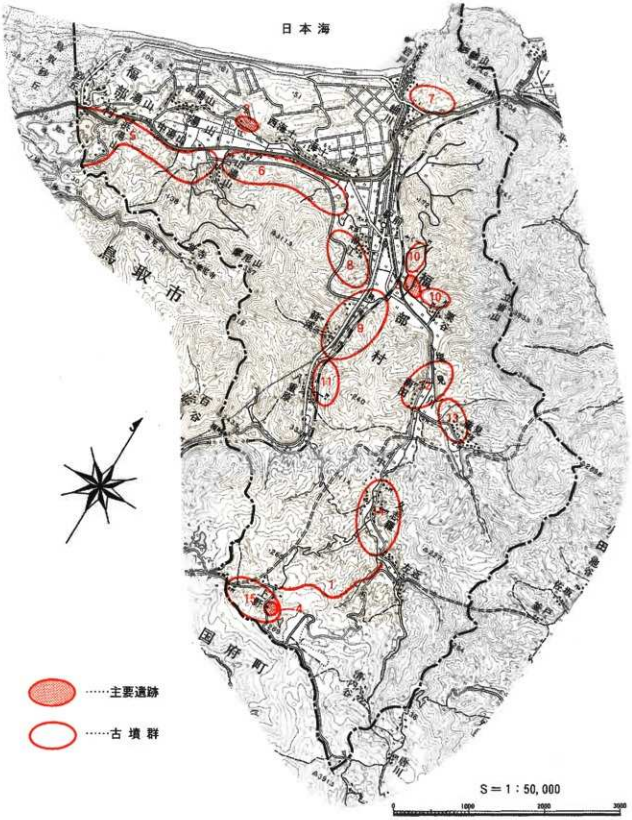
近隣では、福部砂丘に境を接する鳥取市の浜坂砂丘地の中で「浜坂追後遺跡」・「長者ケ庭遺跡」・「栃木山遺跡」が縄文時代の遺物散布地として知られている。この他湖山池の南岸に所在する「布勢遺跡」では、土器・石器・木器等が多量に検出され、南西岸に所在する「桂見遺跡」では、平成5年の発掘調査で縄文時代後期の丸木舟が出土しており、現存するものとしては国内最大級のものである。

現在までに因幡地方で発見されている縄文時代の主要遺跡は、湖岸のような水辺に近い場所を拠点として分布している。

弥生時代になると稲作が普及し、各石器の他に金属器の使用が始まり、隣接する岩美町新井の丘陵部では流水文銅鐸が出土し、浜坂砂丘や湖山砂丘では、銅鏃も発見されている。

縄文時代に人々が定住した栗谷・直浪の両遺跡でも弥生時代の人々が継続して生活していたことが上器・石器などから明らかとなっており、塩見川の源流である上野山台地（標高250m）では、畑地の開墾時に弥生時代中期の上器・扁平片刃石斧などが採取されて「上野遺跡」の存在が確認されている。

上野遺跡は、栗谷遺跡、直浪遺跡とは異なった山間地に所在することから、高地性集落遺跡との関連が注目される遺跡である。この後古墳時代へ移行すると、共同体の高い地位にあった者の死にあたって、壮大な高塚を築き多くの副葬品と共に手厚く埋葬する風習が広まり、因幡地方にも畿内的な様相をおびた大型の古




**挿図2．福部村内遺跡分布図**

1．上野古道遺跡　2．直浪遺跡　3．栗谷遺跡　4．上野遺跡　5．湯山古墳群
6．海土古墳群　7．細川古墳群　8．高江古墳群　9．箭渓古墳群　10．栗谷古墳群
11．八重原古墳群　12．南田古墳群　13．蔵見古墳群　14．久志羅古墳群　15．上野山古墳群

墳が築造されている。

村内でも古くから数多く古墳が確認されており、約200基の古墳が11群にまとめられて展開している。墳丘の形態は前方後円墳・方墳・円墳・横穴と多種に渡るが、その大半はラグーンを見下ろす丘陵の尾根に分布しており、後期古墳に見られる横穴式石室は、平野部から山間部に分布する特徴を示している。

村内における古墳の発掘調査は、その大半が開発に伴う調査であり、「湯山6号墳」では小札を柊の葉状にカットした特異な「小札鉄留眉庇付冑」、「三角板革綴短甲」、「鉄刀」、「鉄鏃」等の武具がセットで副葬されていた例が上げられる。[註2] また「蔵見3号墳」では、全国的に類例の少ない八角形の平面プランを持つ墳丘と、中高式天井石室内から類例の無い鴟尾付陶棺が検出されている例が特筆される。

遺跡の発掘調査例では、直浪遺跡の丘陵台地で採砂作業中の工事関係者によって「柱穴群」が発見され、発掘調査の結果、5世紀から6世紀に渡り継続的に居住したと推定される竪穴式住居跡（1棟）・掘立柱状建築遺構（3棟）を検出している。[註3] 尚、この遺構は、調査終了後埋戻されて現在も保存されている。

古代に律令制が確立された時期には、福部村一帯は、因幡国法美郡服部郷に属しており、海士と八重原には、式内社があった。隣町の岩美町では国の史跡指定となっている白鳳期の岩井廃寺塔跡も遺存し、上野山を越した国府町中郷には因幡の国府が置かれていた。以後この国府町一帯が政治・経済・文化交流の中心地として繁栄して行き、奈良時代の官立寺院である金光明四天王護国之寺（国分僧寺）、法華滅罪之寺（国分尼寺）が建立されている。

本村には、この時代を特徴付ける出土品は極めて少いが、箭渓の墓地で墓穴を掘り下げ中に上師質の「経筒」が出土している。この経筒は、上部がやや広がった高さ24cmの円筒形を呈し、蓋の中心部はキューピー人形の頭のような突起状の特徴あるつまみを有しており、現在は鳥取県立博物館に保管されている。[註4]

註1．福部村教育委員会『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1989・1990
註2．福部村教育委員会『湯山6号墳発掘調査報告書』1978
註3．福部村教育委員会『直浪遺跡発掘調査報告書』1976
註4．鳥取県埋蔵文化財センター『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ4．1989

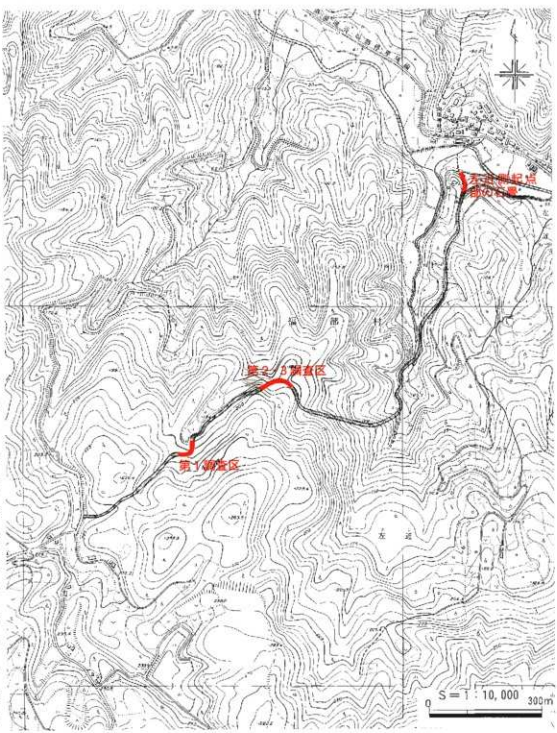
# 第Ⅲ章　発掘調査の概要

## 第１節　上野古道遺跡の概要

上野古道は、標高233mの上野山を経て福部村に接する鳥取市と国府町を結ぶ間道と考えられる道である。左近集落内に鎮座する向垣神社の南方約200mの山裾には、福部村側の起点となる古道に敷設された石畳が延長約60mに渡って実見できる状態で保存されており、古来より重要な道であったことを窺わせている。

現在確認できる古道の延長は、約1.8kmで、その内石畳遺構の敷設が確認できるのは、この福部村側の起点部のみである。

東部広域農道は、岩美町（岩常）を経て福部村蔵見に至り、県道池谷福部停車場線と交差して、上野の山を超える計画で急勾配が続く、従って緩勾配をとるため、蛇行しながらの路線計画であり、上野古道を２ヶ所に渡って交差する計画となっている。




挿図３．上野古道遺跡路線図

その２ヶ所の交差部で敷石状の痕跡が確認され、現地踏査で最初に確認された上野山稜線に近い交差部を第１調査区、北東に約250m下った交差部が調査対象区になるが、石畳遺構が途切れるために別の調査区に区分し、西側を第２調査区、東側を第３調査区として調査を実施した。

## 第２節　第１調査区

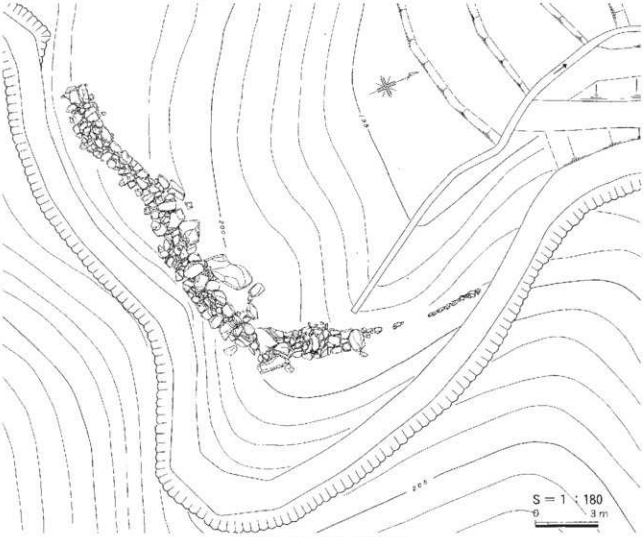
### 遺構の検出

上野古道は、左近集落側の起点部から、上野山の稜線を縦貫する鳥取上野線と福部村久志羅を結ぶ村道久志羅上野線の交差点付近までが確認できる。

第１調査区は、前述の交差点から久志羅側に約150mドって毛合川の支流との合流地に耕作されている梨園から約200m左近方面に下り、標高269mの上野山から幾重にも派生する稜線の狭間の谷に沿って所在している。

現地踏査では、雑木、雑草等が繁茂して荒廃が著しく、当初は古道の存在も予想できなかったが、詳細踏査の結果、約30mに渡って石畳遺構と思われるいくつかの石列が地表面に表れおり、かってそこが道であったことをおぼろげに把握できる程度であった。

敷石状の痕跡は、この小さな谷地形に沿った傾斜面を下って再び緩やかに登り、南の山裾に取りついて谷




挿図４．第１調査区全体図

を下っている。

発掘調査は、調査区に繁茂する雑木と雑草を抜開することで、古道の線形を明瞭にし、遺構上面に堆積していた腐植土を除去すると、幅員1.0m～1.5m、延長28mに渡って石畳遺構が検出され、良好な遺存状態にあることが確認された。

古道の造成にあたっては、山裾の地山斜面を大きくカットして平坦面を造りだし、山側からしみ出る水を受けるために約30cm前後の側溝を山側に設け、小さな谷の底面に導いている。ここでの石畳遺構は、この側溝の肩面に沿って敷設されていることと、転落石と思われる大きな自然石を避けていることから、やや蛇行してドり勾配になって谷底部をドっている。したがって傾斜勾配率は約150‰とやや斜度を増し、途中に一段の階段状ステップを設けることで、傾斜度を緩くする工夫が図られている。

古道の横断するこの小さな谷地形からは、極僅かな流水が認められるが夏の渇水期には干上がる程度のものである。従って、豪雨時に道の流失を防ぐ石橋状の構造物は特に設けないで、谷を渡り次の稜線据へ向かっている。

### 石材の配石状況

石畳の敷設されている延長は約23mで、幅員はほぼ1.5mに統一されており、谷の底部で石畳が途切れる。次の稜線裾に取りつく間は、谷側に人頭大の自然石を座状に配列して盛土を施し、平坦面を造り出している。石畳の石材は、大半が板状節理をもつ「稲葉山安山岩」と呼ばれる安山岩で構成され、川原石のような面的に磨耗したものではなく、綾角が明瞭に残っていることから山の斜面に路頭した転石と思われるが、部分的に雨水等による風化も見られた。石材の平面形態は様々であるが、上面が平滑になるように意識して敷設している。

当調査区では、石畳上面に約150箇の石が確認でき、一部に割ることで２石にしたものが見られたが、大半には加工痕は認められないことから、適度の大きさを吟味して搬入したものと思われる。更に、その大きさから間違いなく元位置を保っていると思われる石が、石畳の脇に所在しており、幅員を確保するために大きく削岩している痕跡も確認された。

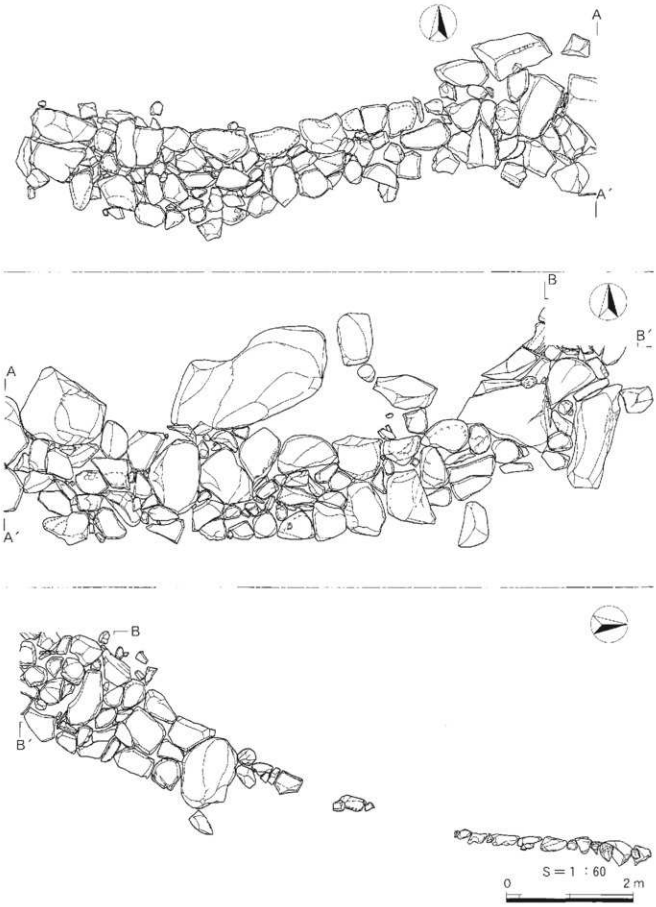
平面形態での石材の大きさは、120cm×80cm前後の大形石から20cm前後の小型のもで構成され、敷石を安定させるために詰め石として握り拳大程度の小型石が使用されている。

石畳の敷設状況は、石畳の起点部に長径の石材を横向きに据えることで石畳の始部とし、両側は上・側面を持つ大きめの石材を石畳外側縁部に据えることで、直線的に石材を配石した意識がみられ、石畳の側端部を際立たせている。したがって、基本的な配石状況は両外側縁部に大きめの石を据え、内面部に少し小さい石を据えて隙間を小型石（栗石）で埋めることで、より強固な石畳と歩行しやすい配石になっているものと思われる。

石材の用い方に特徴が見られるのは、谷側に厚手の石を配し、山側に比較的薄い石を敷設することで、高差を補正し、崩落防止を考慮したものと思われ、石の面的な大きさをもって意図的に敷設する規則性が見られる。

### 石畳の敷設状況

石畳の敷設状況を確認するために、石畳ドにトレンチを設定して掘り下げたが、石畳の基礎をより強固に




挿図５．第１調査区検出石畳遺構平面図

するための小型石（栗石）も見られず、当地域は黒褐色の火山灰土が堆積していることから、堀込み面、敷設過程を確認することはできなかった。

石畳の敷設順序は、谷底部の平坦部では確認できなかったが、傾斜部では低い石に高い石の端部が乗り重なっているものが多くみられたことから、谷部から順に敷設されたものと思われる。

石畳端部の双方を比較すると、谷部はほぼ均一性のある大きさの石材で比較的丁寧に敷設されているが、山裾の高所に位置する石畳は、石材の大きさも様々で、石と石の隙間を埋める（栗石）の使用が少ないことから粗雑な敷設感は否めない。

## 第３節　第２調査区

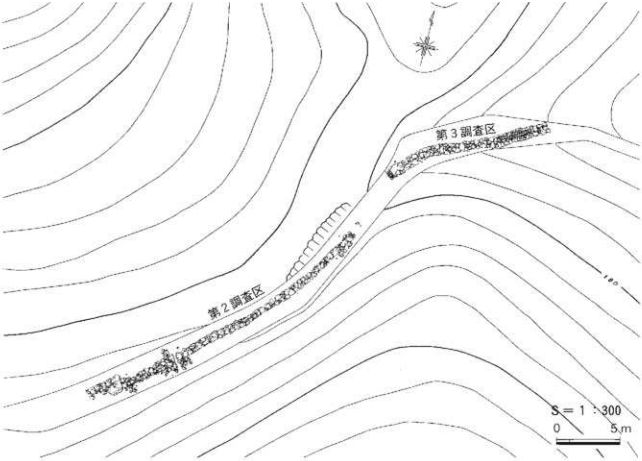
### 遺構の検出

第２調査区は、第１調査区の所在する谷を南の山裾に沿って古道を約450m下り、稜線を切り通しに削平した峠に向かう直前に所在している。

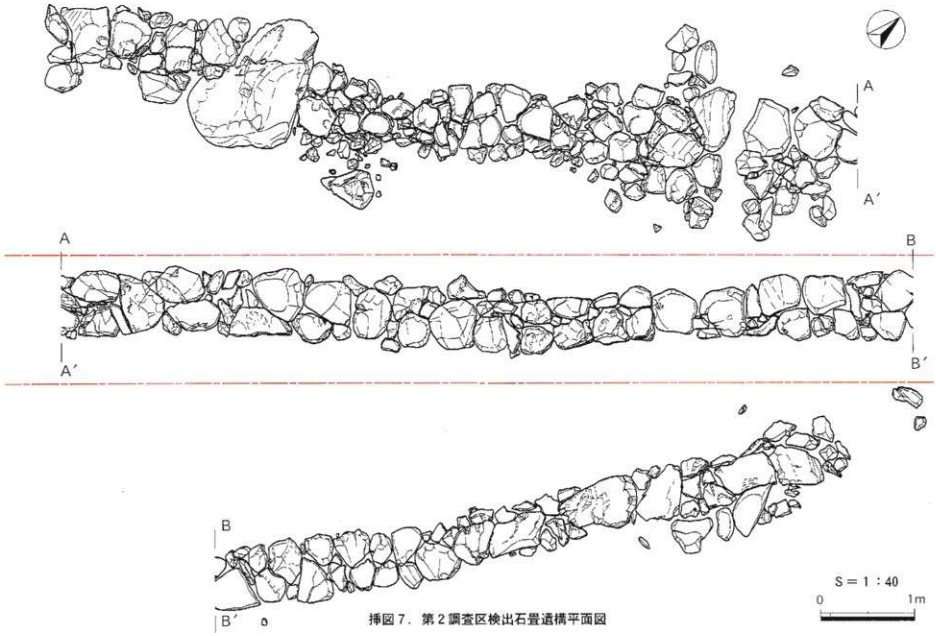
現地踏査では、雑草等が繁茂していたが南の山裾斜面をカットして造られた道状の地形が明瞭に残り、数個の石列上面が地表面に路頂していた。

発掘調査は、調査区に繁茂する雑草を除去し、古道の線形に沿って路盤に堆積した腐植土を除去すると、幅員約70m、延長25mに渡って石畳遺構が検出され、第１調査区の石畳に比してかなり狭いものの、良好な遺存状態にあることが確認された。

古道の造成にあたっては、南西の地山斜面を大きくカットして平坦面を造りだしているが、山側からしみ




挿図６．第２、第３調査区全体図




挿図７．第２調査区検出石畳遺構平面図

出る水を受けるための側溝は検出されなかった。しかし、緩やかな谷地形を背後に控える所には、石畳の敷設を意図的に跳ばして、山側の水を谷側へ導く幅約20cmの横断溝が設けられていた。

急勾配であった第1調査の石畳に比して緩斜面で、平均配率は約40‰となっている。

### 石材の配石状況

石畳の敷設されている延長は約25mで、幅員は狭く70cm程度に統一されており、石材の大半が板状節理をもつ稲葉山安山岩で構成され、川原石のような面的に磨耗したものではなく、綾角が明瞭に残っていることから山の斜面に路頭した転石と思われるが、部分的に雨水等による風化も見られる。石材の平面形態は様々であるが、上面が平滑になるように意識して敷設しているものの、加工痕は認められないことから、適度の大きさを吟味して搬入したものと思われる。

平面形態での石材の大きさは、50cm×60cm前後の大形石から20cm前後の小型のもで構成され、敷石を安定させるために詰め石として握り拳大程度の小型石が使用されている。

第1調査区に比して、石畳の幅員が極端に狭く、起点部に長径の石材を据えて石畳の始部としていた構造に対して長径の石の前に数個のやや小型の石で端部を構成している。また、両側端は上・側面を持つ大きめの石材を外側縁部に据えることで、直線的な石材の配石意識がみられ、石畳の側端部を際立たせている。

基本的な配石状況は不揃いであるが大きな石を連結し、やや小型の石を添えることで石畳の幅員の均一性を保ち、内面部の隙間を少し小さい石（栗石）で埋めることで、より強固な石畳と歩行しやすいように配慮しているものと思われる。

### 石畳の敷設状況

石畳の敷設状況を確認するために、石畳下にトレンチを設定して掘り下げたが、石畳の基礎をを強固にするための小型石（栗石）も見られず、当地域は黒褐色の火山灰土が堆積しており、堀込み面、敷設状況を確認することはできなかった。

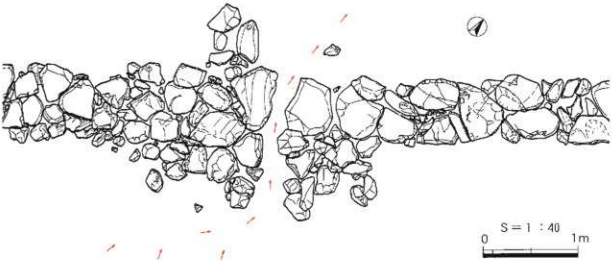
石畳の敷設順序は、石材の接地面が西に敷設されている石材に、東の石材がわずかながら乗り重なっているものが多くみられたことから、基本的に西側から順に敷設されたものと思われる。

石畳端部の双方を比較すると、東側はほぼ均一性のある大きさの石材で比較的丁寧に敷設されているが、横断溝付近から西側はやや小型の石材が多く敷設されていることから、雨水等による泥濘対策を配慮したものではないかと思われる。

### 横断溝

横断溝は、第2調査区の西寄りに構築されており、道に最も悪影響を与える治水対策を施したものである。横断溝の構築されている山斜面には特に水の流れる水路的なものは無いが、小さな谷地形になっていることから、豪雨時に匹敵する大水からの崩壊と、梅雨期の継続的にしみでる泥濘対策であると思われる。

構造は、横断溝の東淵側を山裾まで石畳を延ばすことで、山裾と石畳の間の東側からかの流水を止めて、横断溝へ導き、横断溝の西淵側を道面の末端まで石畳を延ばすことで、谷部へ放水し、東側への逆流を阻止する構造になっている。




挿図８．第２調査区横断溝の流水系統図

## 第４節　第３調査区

### 遺構の検出

第３調査区は、第２調査区東端部の切り通しから東の下り傾斜となった古道に所在している。したがって、第２調査区と第３調査区の石畳遺構はわずか５m程度の間を隔てて所在している。

現地踏査では、雑草等が繁茂していたが南北に横たわる稜線を大きくをカットして造られた切り通しの古道が明瞭に残り、数個の石列上面が地表面に路頭していた。

この調査区は、古道の痕跡は遠か遠方まで下った左近集落付近まで認められるが、前述のとおり東部広域農道建設に係る発掘調査範囲での制約により、東方のに延びている石畳の端部を確認するまでには至らなかった。

発掘調査は、調査区に繁茂する雑草を除去し、古道の線形に沿って路盤に堆積した腐植土を除去すると、幅員約80m～1.0m、延長13mに渡って石畳遺構が検出され、良好な遺存状態であることが確認された。

古道の造成にあたっては、南北に延びる稜線を大きくカットして切り通し面を造りだし、左近集落方向に派生する稜線に取りついて谷を下っている。したがってここでの傾斜勾配率は約160‰とやや斜度を増している。また、両側の稜線からの雨水等を受るための側溝は検出されなかった。

### 石材の配石状況

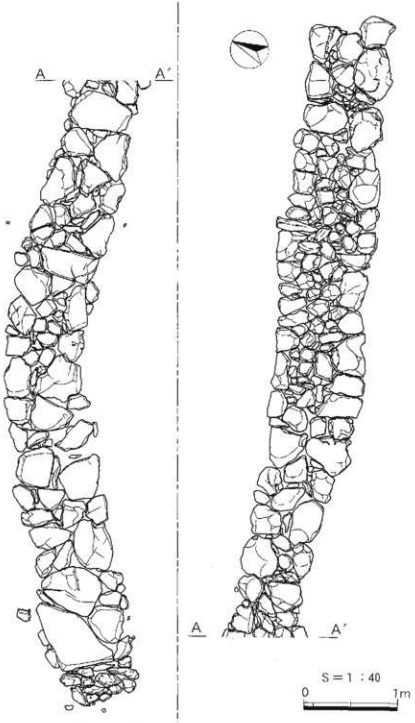
石畳は前述の農道建設工事範囲での制約により、延長13mの範囲までの検出であったが、幅員はほぼ80cmに統一され、両側は面を持つ大きめの石材を外側縁部に据えることで、直線的な石材の配石意識がみられ、石畳の側端部を際立たせている。

石材の大半は、板状節理をもつ稲葉山安山岩で構成され、川原石のような面的に磨耗したものではなく、綾角が明瞭に残っていることから山の斜面に路頭した転石と思われるが、部分的に雨水等による風化も見られる。石材の平面形態は様々であるが、上面が平滑になるように意識して敷設しているものの、加工痕は認められない。

平面形態での石材の大きさは、側端部に70cm×60cm前後の大形石を据えて、内面部に35cm前後の小型のものを据えて構成され、敷石を安定させるための詰め石として握り拳大程度の小型石が使用されている。

全体の敷設状況では、第1・2調査区の配石状況に比して密度の高い詰め石敷設されていることから、丁寧な造りの感がある。石畳の起点部の構造は西端部のみであるが、第2調査区と同様の構造で、長径の石の前に十数個のやや小型の石を詰めて端部を構成している。また、両側端部は面を持つ大きめ石材を外側縁部に据えることで、直線的な石材の配石意識がみられ、石畳の端部を際立たせている。

基本的な配石状況は、石材の大きさが不揃いであるが、両側に大きな石を連結し、やや小型の石内部に詰めることで石畳の幅員の均一性を保ち、内面部の隙間を少し小さい石（栗石）で埋めて、より強固な石畳と歩行しやすいように配慮しているものと思われる。




**挿図9．第3調査区検出石畳遺構平面図**

### 石畳の敷設状況

石畳の敷設状況を確認するために、石畳下にトレンチを設定して掘り下げたが、特に石畳の基礎をを強固にするための小型石（栗石）も見られず、石材を敷設するための堀込み面、敷設状況を確認することはできなかった。

石畳の敷設順序は、石材双方の接地面が東側に敷設されている石材に、西側の石材がわずかながら乗り重なっているものが多くみられたことから、基本的に下方の東側から順に敷設されたものと思われる。

# 第Ⅳ章　出　土　遺　物

## 第１節　遺物の検出状況

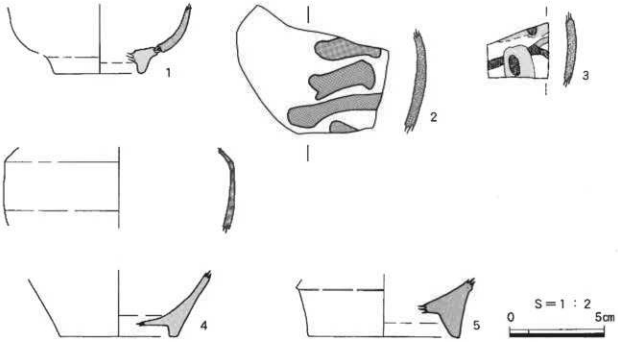
出土遺物が検出されたのは第１・２調査区で、第１調査区からは谷底部で５点の陶磁器片が検出され、第２調査区では、横断溝付近で調整痕と文様構成から３個体と推定される陶磁器片が検出された。いずれも石畳上面で検出され、厚く堆積していた黒灰色土の除去中に検出されたもので、古道の建設時期を推定する重要な遺物と思われるが、石畳上面で検出されたことから石畳が造られた以後のものである。

## 第２節　出土遺物

道という遺構の性格上から遺物の出土は極めて少なく、第１・２調査区で計７個体の陶磁器片が出土しているが、器形等が推定できるものは、胎土、調整痕等から５個体である。

１は第１調査区で検出された胴部と底部片である。胎土は緻密で灰白色を呈し、底部から内湾気味に伸び、外面はヨコナデ後灰褐色の釉がかけられている。内面は、ロクロ調整痕が残り、にぶい茶褐色に発色している。文様部は出土していないが、肥前系の陶胎染付と思われ、陶器質の胎土に化粧を施し、高台接地底面に酸化鉄の付着が認められる。底部と胴部の一部であるため器形を特定することはできないが、内面は釉をかけず露骨にロクロ調整痕が認められることから湯呑みのような椀ではなく、高台、胴部の口径から花瓶又は小徳利のような器形が推定できる。

２・３は牛ノ戸焼若しくは、在地系と思われる徳利の胴部である。２・３共に精緻の胎土で濃灰白色を呈し、内外面共にヨコナデ調整が施され、外面は淡乳白色の釉がかけられている。２は胴部に「三」の文字が




挿図10.　出土遺物実測図

描かれている絵文字徳利で、３は「梅の木に蕾」の部分がモチーフとして描かれていることから、牛ノ戸焼と思われる絵文字徳利片である。

４・５は、在地系の牛ノ戸焼又は出石焼の可能性が高い高台付きの徳利である。４は、精緻の胎土で灰褐色を呈し、肩部に屈曲部をもたせることで、高台部外面に段を付けないで底部から直線的に外向して立ち上がる。高台内面はには釉をかけていない。等の特徴をもつ小型の徳利と思われる。５は、精緻の胎土で灰褐色を呈し、底面が肥厚した徳利の底部で、高台部外面に段をももち、高台内面にも釉を施しているが、全体的に調整が粗雑である。また高台接地面には酸化鉄の付着が認められる。

その他、胎土、調整、釉等前述のものとほぼ同様のものと思われる陶磁器片２点が検出されているが、細片であり、特徴等の分類が不可能であり、詳細について今回の報告ではさしひかえることとする。

# 第Ⅴ章　発掘調査の成果とまとめ

今回の上野古道遺跡発掘調査は、間道ではあるが、福部村から鳥取市・国府町にいたる古道を明らかにする良い機会であった。

踏査によって確認されている古道の延長は、約1.8kmであり、今回の発掘調査によって延長61mの石畳遺構が明らかになり、石畳の頂部が路頭していると思われる所が随所に見られた。したがって、本調査から推定すると遺存状態の良好な石畳が更に続いていると推定される。

第１調査区は、谷部を渡る難所に敷設された石畳で配石状況は、けっして丁寧とはいえないが、石材の搬人等考えると難工事であったものと考えられ、湧水を導く側溝、急勾配を是正する階段状の石畳が検出された。

道という性格から期待もしなかった遺物が検出され、検出場所は谷底部の石畳脇に腰掛けるに都合の良い程度の自然石が横たわり、その石畳上面付近に集中していた。このことは、推測の域を脱しないものの、坂道を登ってきた旅人が疲れを癒すためにこの石に腰掛けた時、徳利をあやまって壊してしまった情景が浮かぶ、人間らしさを髣髴させるものであった。

第２調査区は、他の石畳遺構に比して極端に幅員の狭いもので、石畳の上で人がすれちがうことが不可能な程幅が狭く、特徴といってしまえばそれまでであるが、この調査区に限っての幅員であり、なんらかの理由があるのかも知れない。また、谷部に近い付近では、横断溝が検出され、水から道を守る工夫が的確に行われていた。

第３調査区は、石畳の敷設区域全域の調査はできなかったが、調査範囲では丁寧な配石状況が確認された。

各調査区での石畳の調査結果は、それぞれ特徴を異にしており、具体的には僅か10mと離れていない第２調査区でも石畳の幅員、構造等が極端に異なることから、各調査区の石畳は敷設時期又は、敷設職人が別人であった可能性を示唆している。

この石畳が造られた時期の特定も今調査の大きな目的であり、その時期を推定する遺物は、道という遺構の性格から出土する可能性は極めて少なかったが、思いがけず７個体の陶磁器片が出土し、その内器形等から時期を推定できるものは５個体であった。この僅かな陶磁器片のみで石畳遺構に関連する時期を特定することは危険と思われるが、他に物証が無いため、あえて以下のように推定した。

5個体の陶磁器の内最も古いと思われるものが、肥前系と思われる1で、江戸時代中期頃のものと推定される。残りの4個体は生ノ戸焼又は、出石焼の可能性を持つものと在地系と考えられる徳利片で、明治初期頃のものと推定され、江戸期までさかのぼるものとは思えない。従って1と残りの4個体の間にはかなりの時期差が認められるが、生活空間と異なる道という性格からいたしかたないものと思われる。

この出土遺物は、何れも石畳上面から検出されたものであり、石畳の造られた時期ではなく、供用開始後のものであることから、少なくとも18世紀前半頃には往来していたという時期を推定したものである。したがって、道は改良に改良を重ねて利便性が追求されて行く性格から、道と石畳が同時期に造られたのではなく、今回の推定した石畳の敷設時期よりも以前から供用していた上道で、後に石畳が敷設されたという仮説も成り立つ。

このような石畳遺構は、各地に数多く所在していたと思われるが、交通機関の発達とともに利用頻度が激減し、廃道同然になったものも少なくない。近年まで利用されていたことから一般的な遺跡と扱いを異にして、多くの石畳が保護対象から除外されてきたのも事実である。福部村では、この時代を物語る資料が少なく、隣接市町との交流を特定するための重要な古道の発掘調査として実施した。したがって、石畳の発掘調査例としては、県内ではおそらく今回が初めてのことと思われ、調査方法等を模索しながらの発掘調査であったが、今後の調査方法にも一石を投じる調査であったものと考えている。

**＜参考文献＞**

(1) 中越利夫『道の考古学的研究』1998

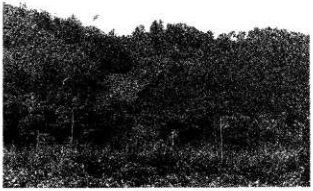
# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | うえのこどういせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 上野古道遺跡発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 福部村埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第１３集 |
| 編著者名 | 谷岡陽一 |
| 編集機関 | 福部村教育委員会 |
| 所在地 | 〒６８９－０１０２　鳥取県岩美郡福部村大字細川６６８ |
| 発行年月日 | 西暦　２０００年３月２０日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上野古道遺跡 | 鳥取県岩美郡福部村大字左近字毛含川1463-8・1463-5<br>赤坂1411<br>井尻谷1403<br>久志鐵字大谷山779・801 | 31033 | 204 | 第1調査区<br>35度<br>30分<br>21秒 | 第1調査区<br>134度<br>18分<br>17秒 | 19990531<br>～<br>19990623 | 350 | 東部広域農道建設 |
| | | | | 第2調査区<br>35度<br>30分<br>36秒 | 第2調査区<br>134度<br>18分<br>23秒 | | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 上野古道遺跡 | 道 | 近世 | 石畳 | 陶磁器 | |

# 図　版　編



① 上野古道遺跡遠景（南東より）

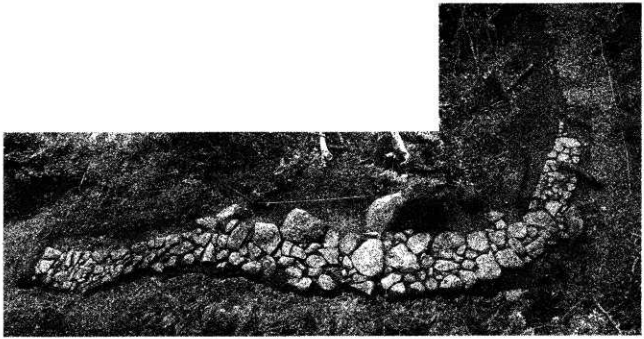
② 上野古道起点部（左近集落）の石畳

③ 調査前の第１調査区

④ 現地踏査で検出された石畳

⑤ 発掘調査作業風景

⑥ 全貌を表した石畳（第１調査区）



① 第１調査区石畳遺構全景（南より）

② 第１調査区石畳遺構（東より）

③ 第１調査区石畳遺構（西より）

④ 第１調査区の崖状に石を配列した古道（北より）

⑤ 第１調査区石畳と崖状の遺構（南より）

① 第 1 調査区の階段状石畳と屈曲部（南より）

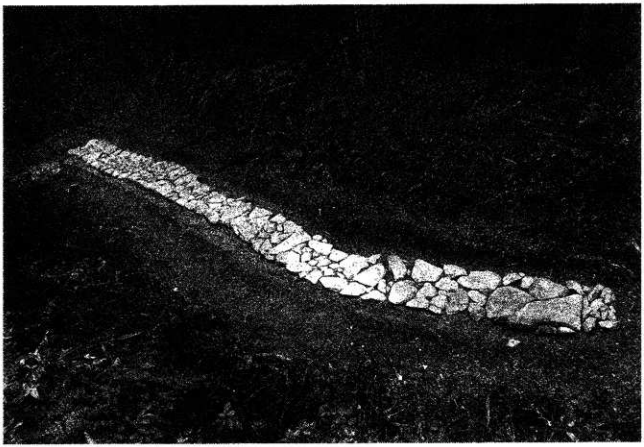
② 第 1 調査区石畳遺構の北側起点部（北より）

③ 調査前の第 2 調査区（北東より）

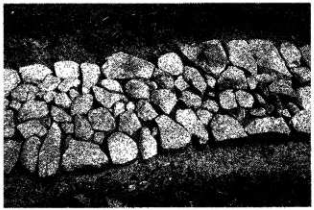
④ 完掘後の第 2 調査区（北東より）

⑤ 第 2 調査区石畳横断溝（北西より）

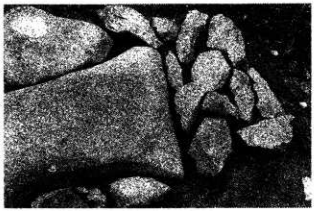
⑥ 完掘後の第 2 調査区（南西より）



① 第3調査区石畳遺構全景（北より）

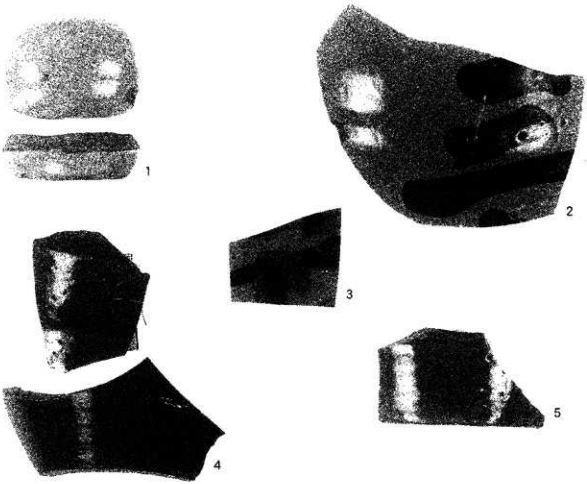


② 第3調査区の石畳遺構敷設状況（北より）



④ 第3調査区西側起点部の拡大（北より）

③ 第3調査区西側起点部の石畳遺構（西より）




① 上野古道遺跡　出土遺物

福部村埋蔵文化財調査報告書　第13集

**上野古道遺跡発掘調査報告書**

平成12(2000)年3月発行

編集　福部村教育委員会
発行　〒689-0102 鳥取県岩美郡福部村湯川668
TEL (0857) 75－2816

印刷　綜合印刷出版株式会社
〒680-0022 鳥取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23－0031